



そら

華宮 遼

そら

たちどまってそらをみあげる

どこまでもどこまでもはてしないあおいそら

ただそこにそんざいし

じっとしているあおいそら

そのなかにうかぶしろいくも

すこしもかたちをとどめることなく

めまぐるしくうごいてゆく

ときにはあたたかくおおきく

ときにはぐるぐるとひしめきあうように

わたしもおなじなのかもしれない

わたしというふへんのそんざい

そのなかでわたしのころは

めまぐるしくへんかする

だったらわたしはそらでいよう

いつもかわらずおだやかなそらでいよう

うえとした

そこにわたしはいた

まわりにはなにもなかった

ただはてしなくひろがるやみのなかに

わたしはいた

まえ

うしろ

みぎ

ひだり

どこをみてもまっくらだった

ぜつぼうときょうふのなか

わたしはそこにしゃがみこんだ

そしてひとつぶのなみだがながれおちた

そのとき

「うえをみてごらん」

どこからかこえがきこえた

ぜつぼうのふちにいたわたしは

やっどのおもいでうえをみた

そこにはあかるくかがやくほしがあった

きつとかみさまはだからうえとしたをつくってくれたんだ

かなしいときにはしたになみだをながせるように

そしてうえにきぼうをみいだせるように

## ピント

いつもぼやけていたわたしのころ

けしきはいつでもかすみのなかにあつて

ただなんとなくあなたをみつめ

ただなんとなくあなたをおいかけていた

いつのひかこころのレンズはみがかれ

だんだんとくつきりとけしきがひろがっていった

けれどもあなたをおうめせんはしっかりとはさだまらず

あいもかわらず

ただなんとなくあなたをみつめ

ただなんとなくあなたをおいかけていた

あのひ

おおきなさくらのきをみあげるあなたをみた

そのしゅんかんわたしはさくらにしつとした

そしておなじしゅんかんわたしのこころのピントはあなたにあった

あのひからピントはあなたにあったまま

これからさきもかわることはないでしょう

あのおおきなさくらのきがくちはてるときがきたとしても

あなたに

つたえたいことがあるの

でもそれをつたえてはいけない

よくわかってる

そのひとことをいってしまったら

わたしたちのかんけいは

はるかぜとともにきえていってしまう

それがこわいの

だからわたしはいわないの

そのひとことを

こころのなかにそっとしまっておくの

ほし

いなかのやまおくでみた

まんてんのほしぞら

おもわず

こえをうしなってしまうほどのかがやき

とかいのけんそうとびるのあいだからみえる

がんばってひかっているようにみえるほしたち

ほんとうはたくさんすぐくすぐくたくさんあるのに

そのほんのいちぶしかみえない

きつとにんげんもおなじ

もつとめだつなにかにかくれてうまってしまう

「そのひとのいいところ」ってそういうものなのかもしれない



## かぜ

「くうきのようなそんざい」

よくきくことば

だったらわたしはかぜのようなそんざいになりたい

はるがきたことをつげくれ

なつのおわりをしらせてくれる

かぜはいつもなにかしらを

わたしたちにおしえてくれる

すこしずつかおりをかえて

かぜに、なりたい

すこしでもこのおもいをあなたにつたえられるように

## 悋気

あなたの視界に映る先にあるのは何？

伍する中でもあなたが扱えるものは私じゃないのね

果てなく砕心しようがあなたは省みずに

わたしはただ一人で恋焦がれています

嗚呼あなたをそねようが虚しいのはどうして？

ねえ お願いだからこれ以上心を乱さないで

分かっています これはただの嫉妬妄想

それだとしても 嗚呼 あなたの視線の先が憎いの

あなたの笑顔は私だけのもの

ねえそんな風に思う私をどうか愛して

わたしの愛は永遠に本物だから

## 鍵

心の底の深いところに

泉があった

わたしは泉を覗き込む

それは蒼く黒く けれどもとても澄んでいて

「ぼちゃん」

わたしは鍵を落とした

心の鍵を

その瞬間

泉は濁り澱んで

わたしに何も見せようとはしてくれない

閉ざされたわたしの心

開け放ってくれるのは一体なんなのだろう